

令和5年度第1回西東京市緑化審議会会議録

会議の名称	令和5年度 第1回西東京市緑化審議会
開催日時	令和5年5月17日(水) 9時30分から正午まで
開催場所	西東京市役所 保谷南分庁舎1階 会議室
出席者	委員：伊藤会長、飯田委員、池田委員、緒方委員、苧草委員、亀田委員、佐藤委員（欠席）、椎名委員、菅原委員（代理：林様 オンライン参加）、高野委員、田巻委員、堤委員、保谷委員、松村委員、松本委員（欠席） 事務局：みどり環境部長 白井、みどり公園課長 渡邊、みどり公園課 成田、高山 支援委託業者：ランドブレイン株式会社 宮脇、伊藤、岡嶋
議題	(1)令和4年度第3回西東京市緑化審議会会議録（案）について (2)西東京市第2次みどりの基本計画策定について
会議資料の名称	資料1 令和4年度第3回西東京市緑化審議会会議録（案） 資料2 西東京市のみどりのまちづくりの方針について
記録方法	<input type="checkbox"/> 全文記録 <input checked="" type="checkbox"/> 発言者の内容ごとの要点記録 <input type="checkbox"/> 会議内容の要点記録
会議内容	
<p><u>開会</u> (事務局) 会議を開催する前に、本日の会議形式について、説明させていただく。</p> <p>5月8日に新型コロナウイルス感染症の感染症法上の位置づけが2類から5類へ移行したことに伴い、様々な制限がなくなり、感染対策は、個人の選択を尊重する対応へと変わったが、今年度の会議形式については、引き続き、会場（オンサイト）とWEB会議の併用にて開催したいと考えている。</p> <p>(会長) それでは資料について事務局より説明いただきたい。</p> <p><u>資料(1) 「令和4年度第3回西東京市緑化審議会会議録（案）」について</u> <u>資料(2) 「西東京市のみどりのまちづくりの方針」について</u></p> <p>～事務局より資料説明～</p> <p>(会長) それでは、次第2. 審議事項に進みたい。</p>	

議題(1)「令和4年度第3回西東京市緑化審議会会議録(案)」について事務局から説明いただきたい。

(事務局)

令和4年度第3回緑化審議会の会議録(案)について、各委員の皆様には4月6日付けで内容確認をお願いさせていただいたものに、修正等のご意見を反映した内容となる。

この場でさらなる修正等のお申し出がなければ、題名の(案)をとり、お名前の箇所は委員という表記に直し、会議録としたい。

(会長)

追加の修正等があれば、ご発言いただきたい。

ここで確認を取るが、会議中でお気づきの点があれば、最後に仰っていただきたい。

議題(2)「西東京市第2次みどりの基本計画策定」について、事務局から説明いただきたい。

議題(2)「西東京市第2次みどりの基本計画策定」について

～委託業者より資料2説明～

(会長)

今日は4ページの将来像、5ページの施策体系、これは大きなテーマとなる。資料の2ページ、3ページに関しては将来像を考える上での導入部分と考えていただき、今回は14歳以下、65歳以上という2つの年代について、フォーカスしていただいた。

4ページの赤枠で囲っている中で、この4つのサイクルは良い整理をしていただいていると思っている。出発点は上からで、「西東京市には特徴あるみどりがある」ということだと思う。ここで武蔵野の原風景と括ってあるが、個人的にはこれまでの会議の中で、特別緑地保全地区や屋敷林という言葉はとても大事だと思う。西原自然公園も元は雑木林が出発点となっていると思うので、雑木林、それがかつての地域の歴史を特徴づけていると思う。それに加えて、現代にまで繋げる取組として花の会の方たちが育ててきたみどりもある。そういった具体的なみどりがここで表現されると、西東京市らしさというのが見えてくる。

2番目に、人の要素がある。「みどりを支えたいと思う人が増え」とあるが、西原自然公園や特別緑地保全地区、子ども会にしても、そういう人たちが既にいるということである。その上で、事務局から紹介いただいたように、それが全ての市民に共有されるということが3番目になり、4ステップ目として個人から社会、「まち」という表現がされているが、社会が育っていく所に連携の話などの体制が深く関係してくる。そういう循環の中でスパイラルアップし、西東京らしいみどりが守られ、育っていくということかと思う。

以上のような点を踏まえ、そこから将来都市像として、「みどりとひとが共に豊かに生きるまち 西東京」という将来像の表現を委員の方々からご意見を伺っていききたい。本日

はこの将来像の方向性を示せると良いと思っている。

(委員)

総論なので特に異論はないが、映像が浮かんでこない。

一番感じるのは、100坪とか200坪くらいの敷地の広い大きな家がなくなり、30坪くらいの小さな家がいっぱい建ち、みどりが消えてしまっている。これは今、私の周りでもかなり深刻だろうと言っている。そういう状況でこんなことが実現できるだろうかというのが正直な印象である。概論として全く反対はないが、画が見えない。

(会長)

農地の宅地化、宅地自体も相続の問題があり、相続の過程の中で、ミニ開発的に行われている建て替えによって、みどりが減っているという現状があるという貴重なご意見だと思う。だからこそ、今、西東京市が保有している緑地に関しては、その保全・活用が問われているということだと思う。

(委員)

保全活用だけでなく、ミニ開発を防ぐようなことが西東京市でできると画が見えてくる。以前、西東京市でどのくらいみどりを増やせる場所があるか聞いたら、ほとんどないと言っていた。

(委員)

みどり公園課自体が、職員が3から5年毎に変わる。前回もお話したが、ボランティアは10年、長い方だと20年やっている。今年度はみどり公園課に新しい方が4人入られた。現場のことがわかるのは課長だけになってしまうと、どうやっていったいいかが非常にわかりにくくなっている。前回、職員を置いて、1人はプロフェッショナルのような形で育てて欲しいとお話した。本気で西東京市のみどりを維持していき、そういうまちづくりをしようという動きであるならば、みどり公園課にもプロフェッショナルな方を西東京市が育てていき、プロフェッショナルにしていく。その方を中心にみどりの全体を見られるようにするべきである。

私は屋敷林保存会をさせていただいているが、西東京市の特別緑地保全地区の方針よりも私たちボランティアの方が先行していることも出てくる。例えば草地の保全は、みどり公園課では、業者の剪定はコストの問題から定期的に行っており、そうすると一斉に全部刈ってしまう。それだと多様性のあるみどりは育てられない。教育の場にも使えないということで、近隣の幼稚園では自然観察の指導員の先生にどうやって教育の場として対応していく形を作った方がいいか、と相談していることもある。むしろ私たちボランティアの方がそういうことに気を遣いながら、夢を持って草を刈ったりしている。やはり本気でみどりを支えていこうというまちづくりをしたいのであれば、その辺りから少し考えて欲しい。

ひとが関わって欲しいということだが、ボランティアも少し変わってきているという印象がある。自己実現をしたいという若い人たちが増えてきて、その辺をどう調整していくかというのが難しい。人数が多くなり、新しいことや楽しくてあまり努力しないうで行ける所にはすぐに飛びつくような人も増えている。私たちが地味に一本釣りして微妙に増えてはいるが、来れる日があったら来るという形で繋いでいる方もおり、人集めが非常に厳しくなってくると思う。

それから前回の議論で、小規模公園がたくさんあり、アイデアワーキングなども過去に行っていると言っていたが、その後どうなったのか。

方針として一般的なものはわかるが、具体的な活動や、予算状況が見えない。

(委員)

西原自然公園で行っていることをどれぐらい理解してこれを書きいただいているのか。歴史的、植生的なフィールドミュージアムになったと言ってもらえるぐらいになったということを理解していただき、それも含めて書きいただいているのかという所がお聞きしたい。アンケートにはみどりについてほとんど書いていない。公園をどういう風にするのか、ということばかりである。

先ほど仰っていたように、小さな乱開発が起きていて、木がほとんど植えられないような住宅街になってしまうのも仕方がないとしたら、やはり市の公園でみどりを守らなくてはならない。例えば泉小わくわく公園にもっと何か木を植えてもらっておけばよかったと、今になって思う。市の公園であればもう少しみどりを増やすなど、宅地内のみどりの減少をカバーするぐらいの公園の作り方をしたいと思っている。

(会長)

そういう風に考えた整備計画の具体的なことまで含まれるということだと思う。

市の職員の配置・異動、或いは予算付けの関係を事務局から何かコメントをお願いしたい。

(事務局)

人員配置について、ウェブアンケートの中にも記載されていたことや、以前からこの委員会の中でもご意見をいただいているということは承知している。実際にまだ具体的な専門員の配置には至っていないが、庁内にはそのような意見があったことを伝えていきたい。ただし、退職などの都合が入ってくると、そこはまた別の話である。

一方、予算については、かなり予算的に厳しいと思っている。みどり公園課としては、みどりを維持管理していくというだけでも相当な予算がかかることは承知しており、現状、市民の方からもみどりや公園管理についてはご意見を頂戴している。そこは予算編成もしくは計画を作る度に、みどり公園課としての意見は上げさせていただいている。一方、ここにいらっしゃる方は緑化審議会という形でご参加いただいているので、みどりの大切さに関心をもっていただいたり、その専門家の方でいらっしゃるという認識をしてい

る。子どもや高齢者への施策という所にも相当数のお金が掛かっている中で、財源の振り分けをどうしていくのか、予算をどうやって有効に分配していくのか、もしくは新たな財源をどうやって生み出していくのか、というところが課題だと思っている。具体的なお答えを出すところまでは申し上げられないが、以上のような考えのもと、庁内で調整を図っている。

(会長)

事務局としては今の職員の配置・異動、或いは退職など個人ご事情を考えると回答し辛いだろうとは思ったが、人の話、職員の配置のところには大きなメスを入れることはハードルが高いであろうと考えた。

例えば、公園緑地に関しても歴史・文化では市に学芸員として専門家がいる。こういった審議会など、1つのアドバイザリーボードとしての専門家たちが関わる、そういう仕組みもあろうかと思う。

さらには公園管理の仕方、包括管理という形で、いこいの森を中心にして54の公園が管理されているが、その他の管理についても指定管理の仕組みの話も含めて検討するということもあると思う。みどり公園課の人事の話だけではなく、専門家がそこに入っていくということは、一つのあり方として考えられるではないか。

特別緑地保全地区の検討の時にも保存会の方々がいらして、保存会の方に「保全も活用もお願いします」というのは現実的ではない。保存会の方には得意な所で活動していただき、保全に関して必要な所は専門の業者が入るという方法もある。活用についても目標があった時にそのタスクを保存会の方にやってもらうということをやイコールにはいけない。そういうことを考えて、事務局が真ん中にあり、アドバイザリーボード的な存在があって、保存会の方など関わっていただくボランティアの色々な立場の方を支えつつ、市民に対するサービスの中心を事務局がやる。それが今はみどり公園課だが、将来的には民間活力導入ということも検討するという位置づけにしていることは、先ほどの指定管理の一形態として議論なされた。

(委員)

さっき仰ったことは承知している。現状は、そのまま放っておいたら、日々気候変動や落枝の問題、事故、色んなことが起こってくるため、私たちボランティアもそれ以上のことを無理してやろうとは思っていないが、危険があれば見過ごせない。業者も入ってはいるが、手が回らない。ここの10年、こういう会になったというのは、現実に合わせて結果だということを知りたい。主導はあくまでもみどり公園課で、相談をしながらいつもやってきているが、予算の関係や、実情に沿った活動をしてきた結果、今のよう形になった。

(会長)

この審議会の前半パートの将来像のお話に戻ると、10年という中期計画の位置づけに

において、市が公園緑地等の整備・維持管理をしていくといった時の将来像をどう考えるのか。

西東京市には貴重な特徴あるみどりがあり、ボランティアやそれぞれ色々な立場での活動があるという所からスタートした時に、10年を目指すと、どんな将来像を描くべきなのか、という所に少しフォーカスしていきたい。

(委員)

畑の周囲をフェンスで囲ってぶどうを植えたが、ぶどうの葉が秋に落ちると、周りの住民からクレームがあった。落ち葉はゴミだと言うし、屋敷林でも同じ状況。仕事をしながら道路に落ちる枯れ葉を完全に綺麗にしようとするのは難しい。

市が持っている公園の周囲に住んでいる人たちが、落ち葉についてどういう認識をしているのか。ゴミという感覚で見られてしまうと対応ができない。西原自然公園も大分近隣住民に配慮する形にした。まず、住んでいる人たちが樹木から出る落ち葉等の問題の認識を変えていただきたい。

うちは落ち葉を掃いて堆肥を作っているが、それも限界がある。まず周りに住む人達が、落ち葉も含めた公園やみどりから出るものに関して、理解をしてもらう方法を検討すべき。そういうことから取り組んでいかなければ、みどりを増やしても色々な問題が生じて、後で大変だったりする。

(会長)

こういった4つのサイクルに落とし込んで考えたときに、例えば3番目、「心身が豊かになっている」とあるが、そうさせるためには理解をする学びの場が必要であるとか、これを実現するために何が必要なのかということを考えなくてはならない。

(委員)

練馬区は外部団体として緑のまちづくりセンターというのがあり、良い窓口になっている。そのまちづくりセンターが練馬区からのお金を受けてやっている取組として、2年程前から4～5箇所、農家や農家を辞めた方が秋に屋敷林の落ち葉がたくさん出る時に、1週間おきに定期的に掃くという取組をやっている。最終的には、まちづくりセンターか、市民で動く仕組みにしていきたいという目標があるようだ。

チラシを作って市民と一緒に落ち葉を掃くということをやっており、私も参加させていただいた。やはり道路を通っているだけでは屋敷の中のことがわからないが、そこに入らしていただく機会になっており、道具などお借りし、一緒に落ち葉を掃いて、それを堆肥場に一緒に入って行き、それが野菜になるというサイクルが見える。それが参加させてもらう市民にとっても凄く学びの場になっているし、普段の風景を享受しているので、少しでも関わりたいという人も意外といらっしゃる。そういう仕組みを試しに作って見たら上手く回って、参加者も多く、参加者の学びも多い。農家の入れなかった所に入らせてもらったらこうなってるんだという、楽しいイベントとして開催している。2023年で3年目に

なると思うが、少しずつ増やしていく取組をやっていて、参考になると思う。農に対して練馬区は色々やられており、良い事例もあるので、対策は色々できるのではないかと思った。

将来像について3点ある。最初に、内容に対して異議があるということでは一切ないが、誰がこのビジョンを作ったのかという事に違和感がある。このビジョンをみどりの基本計画として出していく時に、西東京市の方々が自分達のビジョンだと思えないとあまり意味がない。会長もたくさんアイデアを出していただいていると思うが、西東京市の方がビジョンを説明できるのが理想かと思う。そのために、これがどういう風にできたのかがもう少し見える化されていると良い。また、内容にしても文字が多い。子どもたちが分かるかといったらやや難しく複雑なので、もっとシンプルにする必要があるのではないかと思った。

2点目が、「みどりとひとが共に豊かに生きるまち 西東京」これは例えばみどりの基本計画の副題に入ってくるようなキーワードになるのかと思うが、もうちょっと練っても良いかと思う。まだ個性が足りない。この副題となるであろうものがまだキーワードになっていないと思ったのが率直な印象。回を重ねるごとにもう少し色々考えていければ良い。

3点目が、説明にはなかったが、このまちづくりの施策体系の理念としての将来像があると思うが、この4つのサイクルと次に来る2つの課題、また細分化して4つの課題、さらに5つの方針、その構造的な関係性が見えない。これは見えるべきで、資料に書いてあることに異論はないが、その将来像としての4つというキーワードは、この4つではないのではないかと思った。4つは遠くで繋がっているが、理論的にあまり繋がっていないかと思ったのが率直な印象である。この4つのキーワードに対して、現状を見せるべき所が対応していない。1つのみどりの基本計画という読み物としての理論を整理する必要があるかと思ったのが正直な感想である。整理する時に具体的に何をやるのかということが連動しているはずで、具体的な施策を考え、考えていく中で西東京市の特徴的な施策になるというものからフィードバックして、将来像を描いてみても良いのではないか。これを消す必要はないと思うが、一応置いておいて、具体的な政策をきちんと記載する必要がある。10年間で行う具体的な施策からもう1回フィードバックしたら良いのではないか。

その時に、全ての課題、大きな施策も道筋が通るように高度化できると良い。

(委員)

概ねこれで良いと思うが、この4ページの赤枠で囲ってある内容はこの報告の中だけのものか、それとも、10年間のバイブルみたいなものとして何か事象が起きたときにこれに基づいてこうすべきだということが、みどり公園課やボランティアの人、事業者も分かるようなものなのか。最終的には、施策までやってから作るのも良いのではないか。もう少し単純化して、文字を減らしてほしい。

少し具体的になるが、3ページ目の「くらしと自然の関わりの中で育まれた西東京市のみどり」の下にある「くらしを豊かにする新たなみどり」、この「新たな」という表現は変えた方が良い。おそらく原風景や何かと比較して、「新しいみどり」、という表現だと思

うが、「くらしを豊かにするためのみどり」というような、「まちづくりの中のみどり」というようなもので良いのかと思う。「新たな」というと私としては語弊があると思う。それ以外は良いと思う。

(会長)

今お二方のお話を伺って、やはりわかりやすくシンプルに、そして西東京市らしさということをしっかりクリアにすること、全体的な各フェーズを構造化することが必要である。実は今日、将来像の話から区切ろうと思ったのは、将来像の所で初めの「特徴あるみどり」の特徴をしっかりクリアにしたいからであった。

そして、2ステップ目の「ひとが支えている」というものも、常に活動されている人たちにしっかり光を当てるということからもう1回整理したい。それをするによって、将来像のキャッチコピーも変わるだろうと思っている。

この原案については実は事務局に、この場で少し修正していただきたいということが私の真意であった。今の議論も踏まえ、この4つのフェーズでいった場合に、この4つを施策体系の中に4つのカテゴリーで再整理できるんじゃないかということを思っていた。お話を伺っていると、方針や課題がベースになった将来像のサイクルもあり得る。

(委員)

両方だと思う。将来像から施策、施策から将来像のフィードバックが大切。

(会長)

どちらも整理していくことが課題である。そういう意味で今日は将来像のある程度の方向性を固めてから、次に施策を議論すると思っていたが、どちらかをこの場で決めるというよりも、今日のご意見を伺うという形にしたい。

施策の5ページについて事務局から説明いただきたい。

～委託業者より資料2説明～

(委員)

5ページの「5みどりを伝える」という所で、ぶどうの葉はゴミではないという話から、メリットとデメリットで考えたら、デメリットばかり目に留められてしまっていると思った。農地が近くにあるということで、雨水が自分の家に流れ込まない、夏場の気温が少し下がるなどメリットは当然あるかと思うが、そういうことに気づけず小さな視野でしか農地のことを見ていないのではないか。

市民委員として出させていただいているが、やはり関心があまりないというのは友人・知人と話していても感じる。こういう委員会が立ち上がって集まってやっているということも市報には載っているが、おそらく大多数の市民がご存知ない。

それに対してどうアプローチしていくかということが、重要だと思う。ウェブアンケー

トの2ページ目の教育の所で、ボランティアで就学前の子どもと一緒に参加したり、子どもたちと一緒に草むしりをしたり、お花の手入れ、ごみ拾いができる機会という意見が上がっているの、西東京市全体で考え、行政、地域、保護者を巻き込んだ活動を市民へ投げかけてみてはどうか。

資料の中で「市民が育つ」といった文言もあったと思うが、もっと広く周知して育てていかないと、自分の住んでいる区域しか見えない人ばかりになる。4ページの赤枠の下の所で「みどりに触れることで、心身が豊か（健康）になっている」とあったと思うが、地域のみどりが自分にとっていかに大切なみどりかがわからないのではないか。まずは小学校から色々な体験をしていき、それをボランティアに繋げるということもあると思う。私は保育園で働いている。保護者は享受することには敏感だが、自分が何かをすることに対して鈍感だと思えることが多くある。それが最終的には自分のため、子どものためだという働きかけが凄く必要なことではないか。

そうすると、「お互いさま」という形で、農地があるお陰で自分の家が近隣より気温が低い、雨水が入ってこないなどを感じられる取組になれば良い。

(委員)

全体を見て個人的には、とりあえず全部今まであるものに理由づけをしている感じがする。

うちは、近くにひばりが丘中学校や泉小学校があったが廃校になっている。住んでいる方の話を聞くと、跡地は公園になると良い、という人はすごく多い。ところが、西東京市にどういう利用計画があるかみんな知らない。行政の方は、それを解っているのかどうか。こういう計画は作っても、新たに公園用地として確保できる場所があるのに、市民の方に西東京市の意向が伝わってこない。もちろん公園だけに利用する訳にはいかないということもあると思うが、新しく候補が出た場合、この計画の中でどういう扱いをしているのか。財源の問題など色々あると思うが、緑化審議会の中で、広い土地が出た場合に、まず公園として利用するのが良いのか悪いのかということ、市の方針の中でまず検討していくという仕組みを作るとともに、住民の希望を聞く調査もした方が良い。

それから、公園にするとお金が掛かる。以前、東大生態調和農学機構の社会連携協議会の中で演習林の話が出た。演習林は当初は人工林だったと思うが、植生で言う極相という状態に近い。東大農場を売却して移るといった話があった時に、社会連携協議会の中で提案したのが、それよりも自然に100年かかる森を作るのが良いという話をした。それは余りにも非現実的ということになったが、自分たちの周りにお金の掛かる公園を作るくらいならば、覚悟を決めて50年、100年の期間をかけて、そういう形のお金の掛からない公園を作って、みどりを増やしていくという考えを持って取り組むのも1つの方法だと思う。既存のものに合わせた形になっているが、新たにどうするかが大事である。ただ、身近にある広い場所を一体どう使うのか、住民が持つ疑問に答えられるような仕組みを作るべきで、悪い計画という訳ではない。

あとは一人ひとりがたくさん木を植えるべきで、個人個人が木を植えるメリットがある

いう仕組みも必要である。1年間で100万、150万の費用が掛かり、屋敷林を持っていても何にもならない。挙句の果てに周りからクレームが入る。これではみどりを増やすのは難しい。

公園の場合も、騒音、ごみ、落ち葉の問題、全部絡んでくる。全体として公園は欲しいとは言いが、近くにあると邪魔なのではないかと思う。そこは市民の意識の問題で、恐らく教育の問題も絡んでくる。既存のものを有効に使って、お金が掛からない、身近にできるものを作るところからだと思う。

私は自宅を開放して、住吉森林公園になっているが、雑草を生やすとうちの庭が草だらけになる。定期的に自分で草が生えないように草を刈っている。西東京市に任せると、草がとても伸びてから刈る。種が落ちてからでは手遅れ。それをやってしまうと農家が困る。基本的な、そういう所から入っていかないと、みどりが邪魔になるという結果になる。

農地について、農地は農地の管理をして初めて景観も含めて価値がある。放ってしまうと雑草が生え、定着しない公園と同じことになる。農地は野菜を作って、本来の農地としての利用をして初めて、みどりの価値が出てくるし、周りの人たちもそれで潤うという結果になる。

(委員)

計画の体裁としては良いと思う。しかし、5ページでももっと積極的に打って出ないと、歴史的な緑がみんな無くなり、農地も無くなる。

実現化の方策の所で、いろんな人材とあるが、行政間の連絡も大切だが、やはり一番は協働体制・人材の確保である。西東京市の職員を増やす訳にはいかないため、民間も含めて、人材をどう確保するかが重要である。

財源の確保は、これを見ていると公園で収入を得る必要があるように感じるが、積極的な財源配分を掲げるべきである。みどり施策というのは、選挙や市長選においても、大きな要素がある。積極的な財源配分がないと、財源の確保と言えない。

「屋敷林、雑木林、小金井桜等文化財等の緑と市の特徴あるみどりの保全」の中で、特別緑地保全地区の活用となっているが、活用の前に、これからも積極的に指定していくということを明確にしていきたい。

都市農地の保全は、後継者の生活維持、再建というものもきちんと盛り込んでいただくことこそが計画の重要な柱の施策だと思う。

それから生態系の保全・再生について、これは観測やビオトープの維持管理など、小さなことで終始しているが、屋敷林や雑木林は生物多様性の源泉になっている。そういう意味で、屋敷林の生物多様性の維持のようなものをきちんと入れていきたい。

最後に、「みどりをつくる」とある。ここでは新たな都市公園を作りたい。審議会でする以上は事業認可まで持ち込んで、新しい公園をつくるような項目を入れていきたい。計画決定してある所はたくさんあると思う。その中で必要な部分は、そこをどうやるのか、そういう準備を始めるというのをきちんと入れるべきだと思う。

(委員)

一番の大きいこととお話していただいたのは分かるが、財源のことなど考えると、それぞれ言いたいことを言っても、全然まとまってこない。

泉小わくわく公園に木をたくさん植えてもらった方が良かったのではないかとお話があったが、私はその時の懇談会に参加していた。市民が集まって、どういう公園にしたいかという話をして、あのような形になった。

あそこに野球ができるような広い空間が欲しいというのが地域の方々の一番の希望だった。先にあった北側の高齢者施設の計画、道路の拡幅などの要素がまとまり、現在の計画になった。検討を重ね、小学校の時のシンボルツリーを残したいとの要望なども考え、あの形になったと思う。

西東京市は面積が狭いので、大きい公園を作るといのがどれくらい大変なことか。だからこそ、もう少し周りのみどりを大切にしようというのを、市民それぞれが考えていかなければならない。市民意識の話があったが、新しい住宅ができると自分たちの家の面積に対して、どれだけの居住機能を残せるかということに一生懸命になっており、みどりを少し残すということは一切考えていない。新興住宅地の方もみどりを植えるスペースが全くないという話をよく伺う。

みどりに対する余裕を公園にしか持っていけないため、公園を大きくするという話だったんだろうと思う。

財源の確保など様々な問題はあるが、少しずつ自分たちでみどりを何とかしていくということ以外ない。落ち葉が入ってきたらゴミとして捨てるしか方法がないのではなく、何か違うものとして使えるかという意識が必要である。小さい時からみどりへ親しむという経験も大事なことだと思うのでそういう努力をしなければならぬ。東大演習林でも子ども樹木博士の取組をやっているように、小さい時からみどりに親しまないといけない。それだけではなく、その周りの大人たちもみどりに触れていくということに対して、それぞれの段階で、みどりに触れられる経験を積んでいかないとみどりに関する意識を育むことは難しいのではないか。

(会長)

今色んな方の意見を伺いながら、将来像のキャッチコピーに繋がると思うことがたくさんあった。

(委員)

中長期的な市の方向を考えたときに、実効性のあるものを入れておいた方がよい。やはりみどりの維持というのは絶対に必要である。みどりを作るといことも大切だが、西東京市の面積などを考えると、維持することが大切。施策に関しても、全てを実行するというのは現実的にできないと思っている。その中でもどれを優先して進めるべきなのかを考えると、実効性があり、かつ10年以上生きるような取組になっていくものが良い。

あとは、みどりとひとが係わると考えた時に、小学生や中学生からアプローチするのも

凄く良い。いわゆる現役世代の方に働きかけても、土日しか時間がないと思うが、子どもは教育を受けていて、理科とか社会のような授業の科目ひとつにも活かせる。さらに、子どもに働きかけることで大人も参加していってくれるのではないか。

(委員)

自然というのは子どもの時から親しむことが大切であるという話があったと思うが、私もそう思う。やはり、子どもがみどりに対して興味を持つことで大人になってもそれが続くだろうというのを期待したい。結局、親たちも子どもにそういう方向づけをしないと、子どももなかなかそっちの方向にはいかない。色々な所で子ども向けのイベントを行っていると思うが、それに親も関心を持って、子どもと一緒に出かけるということを市民にやっていただかないと、子どもを育てると言ってもそう簡単にはいかない。

ただ、先ほど行政の人員の問題が出てきたと思うが、人数が少ない中で全てをやれと言っても大変だろうと思う。東京都の例で、小笠原地区と奥多摩地区では、人員増が不可能だということで公園を守るためにレンジャー制度を第三者機関で作ってもらい、移管したという話を聞いたことがある。レンジャーを配置して、公園の面倒を見てもらうことをやっている。西東京市の少ない人数で何かをやろうとしても大変だと思うので、指定管理者制度ではないが、何か別の方法で人員が増えるような企画ができないだろうかということ考えた。

もう1つは、子ども向けのイベントが重要である。例えば、みどり公園課が市民に対し市内の散策を市報で募集しているが、親御さんが子どもを連れて一緒に参加して欲しい。今まではボランティア任せでそういう散策を何年もやっていたと思うが、市の方も説明と一緒にについて行って欲しい。そうすると、散策の中で市民の意見が拾えるのではないか。私は多摩六都科学館に関わっているが、子ども向けのイベントをたくさんやっている。それには必ず親と一緒にについて回って、自然に関わることをたくさんやっている。

(委員)

皆さんの意見を聞いていると、赤枠の中に入っているキャッチコピーの「生きる」という表現は凄く良いと思った。私にとっても非常にありがたいことだが、今回の緑化審議会ではみどりに対して、地域の資源としての「人々の暮らしと共にあるみどり」というのを、農地や屋敷林を例に挙げながら凄くクローズアップされていると思う。新しく作るみどりに関しては例えば落ち葉なども、ゴミではなく大切な資源、自分たちが生きるために大切に必要なものだ、ということを理解してもらう所から始まるという意見は凄く大切なことである。

皆さんが仰っていることは、文化財でも全く同じことが起こっている。文化財であれば生きるための心の豊かさ、みどりであれば温度を下げる、体や生活、健康のためにも色々なものがある。この生きるために必要なものとしてのみどりというのを如何に自分たちが大切だと思い、守っていけるかという仕組みを作っていく。個々の組み合わせの所は課題などのズレがあるので、少しずつ直していく所もあるかと思う。

大きな形としては、生きるためのみどりの大切さ、人々が生きてきた中でできたみどりが西東京市の特徴であるという所を強く打ち出しながら、そのあたりをまとめていくというのはすごく良い形だと思う。ここをもう少し見やすく、シンプルにしつつ、こういった所を強く打ち出せる計画になると凄く個性的になる。みどり自体は、武蔵野の原風景や屋敷林等、練馬にしろ小平にしろ、この周辺はみんな一緒に特徴を出すというのは結構難しい。ただ、何をその中で西東京市として一番アピールするかという所が計画の一番の肝だと思う。「生きる」といった言葉は凄く良い。生活で大切な、生きていく中でできたみどりで、それをどうやったらみんなに分かってもらえるのか、どうしたら子どもたちに伝えていけるのか。その辺りを上手くクローズアップできるような計画にすると、様々なことが絡み合いつつ、良いものになっていくだろうと思う。

個別の所はもう少し整理をした方が良い所もあるが、良い意見が今日はたくさん出てきて、西東京市のどんなみどりを計画の中で推したいか、新しいみどりを作るのが良いのか、今ある小さなみどりを大切にしていって行く所に重点を置くと良いのか。その辺りを肝にしていくと良い計画になるのではないかな。

(委員)

東京都でも「東京の緑の保全・創出支援プログラム」を作成し、各局から様々な支援策を区市町村に対して用意している。西東京市もこの支援制度を使っている。一方で、民有地のみどりというと、行政の支援が入りにくい部分はあるが、みどりの保全といった観点だけではなく、教育や福祉などの観点でも民間への助成制度があるので、支援制度を上手く組み合わせていくというやり方も西東京市の計画を実現していく視点としては大事だと思う。

(会長)

今の組み合わせ、助成制度の話も、詳しく確認しながらできれば良いと思う。

まだまだご意見あると思うが、今仰ることのできなかつたご意見は事務局にメール等で聞かせていただきたい。

今伺った中で、西東京市らしさのみどりは何なのかということ整理するとともに、子どもや10年後ということ考えた時に、「子ども」という言葉はちょっと限定的すぎるので、「未来」ということがテーマになるのかと思う。指定管理者の枠組みだけだが、西東京市は市民協働担当があると考え、「市民と共に」ということは特徴ではあるし、そこはさらに発展させる方向もあるのではないかな。「生きる」という言葉が、学び、育ち、育んできている、というような言葉につながることも含めて、次回は複数案を作っていたきたい。

この5ページに関して、このように個別的に分けているが、前回の審議会の中で特別緑地保全地区のことがベースで、ずっと皆様と保全と活用の一体化っていうことでやってきた。こうやって切り分けてしまうとそういった取組が全くなくなってしまっている気がする。それは気になった所である。

(委員)

この場で一つだけ確認したい。ひばりが丘中学校の跡地について、冒頭で、相対的に子どもや高齢者が多いがみどりが少ないエリアという話で、ひばりが丘中学校も含まれるエリアだと思った。ここの中学校の跡地が公園になるという話が全くない話なのか聞かせて欲しい。

(事務局)

元ひばりが丘中学校は、14歳以下のメッシュの黄色い所の右端あたりにあるのではないかと。この赤い所は、新しくひばりが丘中学校が移転した場所である。元ひばりが丘中学校の場所は、配置を見た時に泉小わくわく公園や、西東京いこいの森公園が近くにあり、その間にある場所のため、少し歩けば公園は結構ある場所だという見方もできる。そのような状況や、全体の配置・バランスを踏まえると、ここが公園や緑地になるかというのは現時点では不透明である。

(会長)

その他、事務局から日程等の確認がある。

(事務局)

次回の審議会について、委員の皆様ご都合はいかがか。多くの方が参加できる日程としたいと考えており、現時点においてご都合をお伺いしたい。

また、本日欠席者のご都合も確認し、再度こちらから連絡させていただく。

(会長)

以上で本日の会議を閉会する。

以上